

ドクター内田の ギョクゴキ

〜18〜



「コージカルテット」で演奏する左から富樫雅彦、渡辺貞夫、八木正生

久野(史郎)ちゃんの開いた「ジャムセッション」で見た富樫雅彦少年の天才ぶりは集まった人たちの度肝を抜いたが、それも道理だった。アメリカ留学後は、その「コージカルテット」を引き継いだ渡辺貞夫の下で働き、東

京では知る人ぞ知るといふ存在になっていた。

おそろくあのころすでに、バップドラムをたたかせたら実力日本一と言っても良かったかもしれない。だから僕らが、そのスリリングなドラムに驚きあきれたのも当たり前だったんだねえ。

ではどうしてそんな前途洋々たる十六歳の少年が、ジャズではまだまだ遅れていた名古屋に来て、しかも身をひ

気づいた彼は、「コージカルテット」が仕事に恵まれなくて解散したのを機に、何とか立ち直ろうと、親身に考えてくれる久野ちゃんを頼って逃れて来たのだった。

ずつと後になって、インタビュに答えて、「名古屋のころは、久野ちゃんのお店でサラボーンの歌に涙しながら、この先どうなっちゃうんだらうと思つて、何度も自殺を考えたと話しているか

自殺も考えた 天才富樫少年

そめるように暮らしていたんだらうか。

年配の方なら「記憶と想うけれど、当時一部のジャズメンの間では、麻薬の悪癖がひそかに染み込んでいた。世間知らずのまま、この世界に入った富樫少年に、悪い先輩の誘いの手がのびたんだらうね。いつの間にか、クスリ

の誘惑にのめり込んでしまったみたいだった。

よやくそのおそろしさにわいは、ジャズに限って言え

は、今では想像もつかないほどの活気に満ちていた。

「メイフラワー」では、僕らの「ホットクラブ」でおなじみになったギターの富田一照が、すぐ向かいの「レットダンス」では和田直がフルバンドのレギュラーとして働いていた。もつとも、どの店も、ジャズなんて浮かんでこない妙な名前で、いかにないけれどね。

やる気を出したかに見えた富樫少年は、「コージカルテット」時代の仲間でベーシストの高田、久野ちゃん(ひいぎのバップピアノニスト)、やはり東京から来たピアノの石川、それに豪快なアルト奏者の郷間を加えたカルテットを結成して、「クラブ東京」の専属バンドとなり、その演奏を始めたのだ。

あれはたしかにすごいバンドだった。そしてこのままだつたら、「ジャズファン、失意の天才少年をよみがえらす」なんていう見出しの記事になるような美談かと思つたら、やっぱり物事そうすんなりとはいかないものだねえ。

(内田 修)